

スゴイ！ ～雪まつりの思い出、日本の思い出～

トマシュ・コツランガ

人は称賛やお世辞が大好きです。特にアーティストは誰よりもそうで… アート作品に対する観客の理解と好感は、アーティストにとってきわめて重要です。世界中を旅して新しい作品やプロジェクトを展示することは、いつもチャレンジです。北海道への旅はその種の大きな経験の一つで、忘れがたいものになりました。

さっぽろ雪まつり

どうして忘れがたいのか？ さっぽろ雪まつりのユニークさはどこにあるのか？ ——答えは簡単で、人々です！ 雪でも、雪像作り自体でもなく… 観客との出会いです。終りのない会話、数百の写真撮影、数千の人々の感嘆の声。アイデアは何ですか？ これは何を表しているのですか？ この形は何ですか？ といった熱い反応や質問の数々。生き生きとした反応と賛嘆の声、これこそアーティストの期待するものですが、多くの場合、夢に終わります… しかしときには現実となることもあって、これはほんとうは夢なのだと思っていると、きっと誰かの「スゴイ！」という大きな声で目が覚めるのです。

初めての日本

初めて日本を訪れたときのことはよく覚えています。ほんの4年前のことで、私の想像や期待、ステレオタイプはすべて見直さなければなりませんでした。

若いときの日本への憧れの記憶、安部公房や川端康成、そして大阪のペンフレンドからもらった手紙に描かれていたナマズの絵は、30年以上前のことで、ほとんど消えてしまい… 過ぎ去った歳月とともに失われていました。残ったのは、色あせた思い出の断片、本や映画の一場面や、それまでに見たなかでいちばん薄い紙に書かれた、色あせた手紙の色あせたインクでした。

むかし私も学生だったころ、未知の女学生から手紙をもらいました。そのころ日本は「遙かかなた」の



国で、インターネットもソーシャルメディアもなく、よく手紙をくれる人がいて… ポーランドは「別の国」、日本は「別の惑星」のようでした。

こうした記憶が突然目を覚ましたのです。

生き生きとした想像が頭の中で爆発して… 行くぞ！

青春の憧れの国、「別の惑星」の国、日本へ。

まず東京に着きました。タタミ敷きの典型的な和室を予約してありました。そのころ私はとても忙しくて、ロケーションを注意深くチェックする暇がなかったのです。都心、メトロ駅近く、よし、申し分なし。長いフライトで二度乗り換えて成田に着き、列車とメトロを乗り継いで街中のホテルに向い、部屋に入りました。なかなかいい、とてもいい… タタミ、東京、日本、康成、黒澤、公房、そして30年以上前に手紙をくれた女学生のカモト・ヨーコ、すべてが脳裏に甦り… 色あせた思い出が再びカラーになったのです。

数分後には街に出ることに決めました。本物の日本を見て、雰囲気を感じて、古い想像を現実と照らし合わせよう。ついに来た!!! 長年の夢だった。街に出て本や映画の「ヒーローすべて」に会おう…

外に出て、最初の角を左に曲がって…??? これは何？ 奇妙な服を着た少女が、何やら日本語で説明したパンフレットをくれた… さらに数歩進むと、さらに奇妙キテレツな服を着た別の少女が別のパンフレットをくれた… ここはどこ？ 「砂の女」はどこ？ 消えてしまったの？ 「眠れる美女」はどこ？ 彼女たちも消えてしまったの？ 瞬くネオンの光とパチンコの音がヒントだった… メイドの衣裳の新しい「ヒロイン」が私を歓迎してくれた。ここは秋葉原、本物の日本、でもまたまた「別の惑星」のよう。

スゴイ！

あれから多くのことが変わり、今年は5度目の日本訪問。日本で多くの土地を訪ね、多くの人に会い… たくさんの友人ができて、「別の惑星」の日本から妻を迎えた… 数年前はショックだったけれど、いまは「スゴイ！」と言える。

(2018.3、安藤厚訳)

Tomasz Kocłęga 彫刻家、カトヴィツェ美術大学講師、「石炭の王国」ザブジェ市在住。ポーランド雪像チーム Snow Art Poland リーダー。さっぽろ雪まつりに3回、なよろ国際雪像彫刻大会ジャパンカップに1回出場。

写真(上) コツランガさんと安藤会長

(左) Snow Art Poland チームと日本の子どもたち